

柳田国男監修の高校国語教科書における『風土記』

関谷由一

一、はじめに

日本民俗学の創始者、柳田国男（一八七五—一九六二）の監修した高校国語教科書（以下、柳田教科書）というと、古文教材には神話・伝承を豊富に載せているだろうと思われるかもしれない。しかも、柳田教科書には、『風土記』からも二編の記事を採択している。しかしながら、教科書を実見するとそのような予想は裏切られ、むしろ、神話的な説話を排する姿勢すら見て取れる。そこから、彼の教材観を端的にうかがい知ることができるのである。

二、柳田教科書と『風土記』について

柳田国男は、昭和二三年（一九四八）五月に東京書籍からの委託を受け、国語教科書の監修を開始する。柳田は、自ら考え、判断させようとしなかった戦前の国語教育への猛省に立ち（一）、教科書の構成はもとより、個々の教材選定に至るまで細かな指示を与えたとされる。翌年に小学校・中学校用教科書『新しい国語』が、昭和二年（一九五四）に高等学校用教科書『国語』が完成し、それぞれ次の年に刊行・使用を開始している。柳田の高校教科書は、小・中

学校教科書における基本方針（柳田三原則）の一つである「文芸に片寄らない」を継承し、次のような考えに基づいて作られた^②。

- ・教科書を少くし、内容の興味をもつて読書心を刺激する。
- ・名文礼拝の悪癖を改め、普通文体を普及させる。
- ・散文を主とし、韻文を抑える。
- ・文芸に片寄らず、できるだけ実用文を採用する。
- ・内容をつとめて民衆の生活に近づける。
- ・教材の割合は現代を中心に、足利以前は少なくする。

この方針は、実際の教材採択に如実に反映される。『源氏物語』『枕草子』『徒然草』『奥の細道』といった著名教材を極力排し、従来顧みられなかった近世の記録・紀行・地誌や口語文を多数採用するのである^③。この柳田教科書の一つ、三年生向けの『国語 高等学校三年上』（以下、東書 1955）には、上代文学を代表する形で、『古事記』と並んで、『風土記』の記事が二点、取り上げられている。

八世紀初頭に編まれた地誌である『風土記』は、古代の地方の歴史・文化を伝える貴重な史料とは認められても、文学作品としての評価は長らく低いままであった。その点、近世・近代に膨大な研究

が積み重ねられ、一般の知名度も高い『万葉集』や『古事記』とは事情を異にしている。昭和三〇年代に秋本吉郎の研究書^③が公刊されるころからこうした状況も変わり、昭和四〇年前後には高校教科書に『風土記』が掲載されることも珍しくなくなった。もつとも、平成後期からは教材の絞り込みの結果か、『古事記』のヤマトタケル物語を除いて、上代の散文作品が皆無というのが現状である。

こうした中、これらに先んじて、柳田教科書の中に『風土記』があることは、やはり注目に値する。昨今は、古典教育の存在意義が問われ、いわゆる定番教材を用い、品詞分解と逐語訳に終始する旧態依然とした授業が批判される。その一方、最新の学習指導要領に基づいて刊行される教科書を見ると、古文に関しては教材選択が十年一日のごとく、ほとんど改訂されていない。こうした現状を見るに、敗戦直後の大混乱の中、国語教育の一新を唱えて意欲的に新教材を次々発掘・紹介した柳田の学問的良心の堅固さが、改めて顧みられるのである。

三、高校国語教科書における『風土記』

先行研究^④および稿者の調査によると、昭和二四年（一九四九）以降に刊行された高等学校国語教科書二三五九点のうち、『風土記』を載せるものは六〇点である^⑤。これらを記事ごとに整理したものが、【表一】となる^⑥。

【表1】『風土記』の収録状況 ⁽⁸⁾			
書名	記事名	掲載数	
常陸国風土記	(a)福慈と筑波	18	27
	(b)童子女の松原	3	
	(c)夜刀の神	2	
	(d)晡時臥山	1	
	(e)その他不明	3	
出雲国風土記	(f)国引き	18	21
	(g)安来郷	3	
丹後国風土記逸文	(h)比治の真奈井	6	13
	(i)浦島子	6	
	(j)その他不明	1	
播磨国風土記	(k)壱岡の里	8	8
豊後国風土記	(l)餅の的	5	8
	(m)その他不明	3	
肥前国風土記	(n)杵島山	4	4
近江国風土記逸文	(o)伊香の小江	1	1
播磨国風土記逸文	(p)駒手御井	1	1

東書 1965 が採用したのは、『常陸国風土記』の「(c)夜刀の神」、および『出雲国風土記』の「(g)安来郷」である。この表を見てもわかるように、これら二つは、教科書に採用される『風土記』記事として一般的なものではない。柳田以前に採用がなく、柳田以後にも一、二を除いて顧みられたことのないマイナーな記事である。

『風土記』の文章が教科書に採用される時、もつとも人気があつ

たのは、『常陸国風土記』では「(a)福慈と筑波」、『出雲国風土記』では「(f)国引き」である。その他、『丹後国風土記逸文』の「(h)比治の真奈井」、『播磨国風土記』の「(k)聖岡の里」、『豊後国風土記』の「(l)餅の的」などもある。東書 1955 はなぜ、これらを採らなかったのか。

『風土記』は、「山川原野の名号の由る所」を報告することを求めた和銅六年(七一二)五月二日の官命に基づいて編まれた。そのため、ほぼ全ての記事が、地名起源を語る「古老」の伝承記録としての体裁を取る。【表1】の(a)~(p)の全てがそうした形式の記事である。その中で、東書 1955 の「(c)夜刀の神」および「(g)安来郡」が、他の記事と異なる点は、その記録的性質にある。

四、夜刀の神

東書 1955 の載せる「(c)夜刀の神」は、次のような話である。同書の本文・読み下しをそのまま掲げる(以下同じ)。

古老のいへらく、石村の玉穂の宮に大八洲しらしめしし天皇の
世、人あり、箭栝氏麻多智といふ。郡より西の谷の葦原をみて、
ひらきて新たに田を治りき。この時、夜刀の神、相群れひきあ
て「ことごと」にきたり、かにかくにさまたげて、たづくることなか
らしめき。俗にいふ、蛇をいひて夜刀の神となす。その形、蛇の身にして頭に角
あり。率紀免難、時に見る人あれば、家門を破滅し、子孫継がず。おとよてこの郡の
かたはらの郊原にいと多くすみりと。ここに麻多智、大きに怒りの情を
おこし、甲鎧をつけて、自身仗をとり、打ち殺し馳せおひき。

すなはち山口にいたり、杭をたててさかひの堀を置き、夜刀の神に告げていひしく、「これより上は、神の地たることをゆるさむ。これより下は、人の田となすべし。今より後、われ、神のはふりとなりて、とこしへに敬ひ祭らむ。ねがはくはたたることなく恨むことなかれ。」といひて、社を設けて、初めて祭りきといへり。すなはちまた耕田一十町余りをおこし、麻多智の子孫相うけて、祭をいたし、今にいたるまで絶えず。その後、難波の長柄の豊前の大宮に天の下しらしめしし天皇の世にいたりて、壬生連麻呂、初めてその谷を占めて、池の堤を築かしめき。時に夜刀の神、池のほとりの椎の樹にのぼりつどひ、時を經れども去らざりき。ここに麻呂、声をあげて大きに言ひしく、この池を修めしむるゆゑは、民をいかにすにあり。何の神、たれの祇ども、ことむけに従はざる。」といひて、すなはち役の民にのりごとしていひしく、「目に見ゆるくさぐさのもの、魚虫の類は、はばかりおそるるところなく、ことごとくに打ち殺せ。」と言ひをはれば、その時、神蛇、避け隠れき。いはゆるその池は、今、椎の井となづく。池のかたはらに椎の株ありて、清き泉のいづる所なれば、井をとりて池に名づく。すなはち香島に向かふ陸の駅道なり。

右の記事は、『常陸国風土記』行方郡の条にある。継体天皇の御代(六世紀初頭)、箭栝麻多智という在地豪族が、郡家の西の谷を開墾しようとした。その際、「夜刀の神」と呼ばれる蛇神が妨害した。

ヤトとは、谷を意味する東国語「ヤツ」と同源の語であり、谷川の水神としての性格を持つことがわかる。麻多智はこの神と戦い、谷の上流部まで追い出し、そこから先をこの神の領域として祭り続けることを誓った。いわば、神との休戦である。この休戦は再び、人間側によつて破られる。孝徳天皇の御代（七世紀半ば）、在地の支配者である壬生麻呂（茨城国造である）は谷に堤を作り、溜池を作った。麻多智によつて保証されたはずの神域を侵された蛇神は抗議したが、壬生麻呂の「民を生かすための工事を妨げるものは殺せ」という強硬な姿勢を見て、なすすべもなく退散した。

このような内容の記事であるが、在地神との間に緊張関係を持ちつつも、確実に開発が進み、神への畏怖が薄らいでいく様を描いた点に特徴がある。これは「神話」ならぬ「反神話」とでもいうべき記事であり、かつ継体天皇（石村玉穂の宮の天皇）・孝徳天皇（難波長柄豊前の宮の天皇）といったように、比較的近い時代の具体的な時を示している点で、「伝説」というより「歴史」叙述に近いものとなっている。『常陸国風土記』の中には、崇神天皇の時代に派遣された將軍や、「倭武天皇」（景行天皇の皇子ヤマトタケルを指すと思われる）といった遠い過去の伝説的な英雄の事績や、さらに古く、時代を特定しない「古」の神々の説話も多く載るが、そうした物語群にあつて異彩を放っている。

五、(G)安来郷

東書 1055 の載せる「(G)安来郷」は、次のような話である。

安来の郷、郡家の東南二十七里一百八十步なり。神須佐之鳥の命、天の壁立てめぐらしましき。その時、ここに来ましてのりたまひしく、「あがみ心は、安く平らかなりぬ。」とのりたまひき。かれ、安来といふ。すなはち北の海に毘売埼あり。飛鳥の淨御原の宮に天の下しらしめし天皇のみ代、甲戌の七月十三日、語臣猪麻呂がむすめ、くだりの埼に遊びて、たまさかにわににあひ、そこなはえて歸らざりき。その時、父猪麻呂、そこなはえしむすめを毘売埼のほとりにをさめ、おほ声に憤り、天にさけび、地に踊り、行きてはなき、ゐては嘆き、昼夜たしなみてをさめし所をさることなし。かくするほどに、数日を経たり。しかして後、いきどほりのころを興し、麻呂、箭の鋭き鋒を撰りてたよりの所にをり、やがてをがみ訴へて言ひしく、「天つ神千五百万、地つ祇千五百万、ならびにこの国に静よります三百九十九の社、またわたつみたち、大神の和魂は静まりて、荒魂は、ことごとく猪麻呂がむところによりたまへ。まことに神靈しましまさば、あがいたるを助けたまへ。ここをもちて神靈の神たるを知らむ。」といひしかば、その時、しましありて、わに百余り、静かに一つのわにをかくみめぐり、おもふるにゐて、あるところにより来よりて、進まず退かず、なほかくみめぐれるのみなりき。その時鋒をあげて、中央なる一つのわにをさし殺し捕りき。すでにをへて、しかして後、

百余りのわにあらけき。たちさけばむすめの脛^{はき}をほふりいだしき。よりてわにをたちさきてくしに掛けて路^{みち}のほとりに立てき。安来の郷の人、語臣らが父なり。その時よりこのかた、今日にいたるまでに、

六十歳を経たり。

右の記事は、『出雲国風土記』意^お宇郡の安来郷の条にある。はじめに「安来(ヤスキ)」の地名起源が、スサノヲに託して述べられる。その次に郷内の小地名である「毘売埼^{ひめさき}」の地名起源として、天武天皇の御代に起こった悲劇と復讐譚が語られる。語臣猪麻呂という者の娘がこの地の海浜で「わに」(サメの一種とも想像上の生き物ともされるが、島根郡ではイルカやスズキなどと共に実在の魚類として言及される)に襲われ、死亡した。猪麻呂は天神地祇、および出雲国中の神に祈る。それは、「和魂」を不要のものとし、「荒魂」のみを招魂するような、呪詛に似た激しいものであった。その験によつてか、娘を殺したワニは他のワニたちに囲まれて目の前に現われ、猪麻呂は復讐を果たす。猪麻呂は『風土記』編纂当時に生存していた語臣の父であり、それは六〇年前の出来事であった。

この記事は「甲戌の七月十三日」、すなわち天武天皇三年(六七四)という、近い時代の実在人物の身边を語る、きわめて歴史的、かつ非神話的な内容となっている。神威を語るものではあるが、どの神の働きによるものかは明かされず、むしろ猪麻呂の鬼気迫る訴えの方に重きを置いている。こうした語り方は『出雲国風土記』では他に例がない。当国風土記の地名起源譚は、いわゆる出雲大社の祭神・

オホクニヌシや、スサノヲ、オミヅノ、その他の神々の事績として語られることがほとんどであり、そこには天皇すら登場しないからである。

六、記録か、神話・伝説か

このように、東書1955で取り上げられた二つの記事は、たとえば次のような意味での「神話」とはかけ離れている。

神話とは、原古つまり世界のはじめの時代における一回的な出来事を語った物語で、その内容を伝承者は真実であると信じている。したがって神話は聖なる物語である。神話は存在するものを単に説明するばかりでなく、その存在理由を基礎づけるものであり、原古における神話的な出来事は、のちの人間が従い守るべき範型を提供している。

ちなみに、「伝説」は、原古と現代の中間にあたる時代の、特定の人間による特定の土地での行為を伝えるもので、「昔話」は漠とした時・場所、非特定の人による行為を伝えるもの、という相違があるとされる⁽⁹⁾。

こうした「神話」の把握において、原古になされた聖なる行為を、人ならぬ神を主体とする行為ととらえるならば、高校教科書に多く採用された『風土記』記事の多くが、「神話」であることに気づく。たとえば、筑波山の祭礼の起源を語る、『常陸国風土記』の「(a)福慈と筑波」。昔、神々の親である「神祖^{おみ}の尊^{みこと}」が諸神の許を訪れた時、

福慈の神(富士山)家内行事を理由に家に入れなかったのに対し、筑波の神(筑波山)は歓迎したため、富士山は年中雪が降り人が登れない不毛の山となり、筑波山は温暖で春秋に多くの人を惹きつける山になったという(筑波郡)。

同じく『常陸国風土記』の「(b)童子女の松原」は、「古」、那賀国から来た「神のヲトメ」と、海上国から来た「神のヲトメ」が出会い、松原に化したというものである(香島郡)。「(d)晴時臥山」は、昔(時代は示されない)、この地の女性のもとに神が訪れ、夫婦となった後に、女性は蛇を産み、この蛇が昇天に失敗した結果、晴時臥山に鎮座するに至る話である(同書・那賀郡)。

『出雲国風土記』の「(f)国引き」は、出雲国の国土創成譚である。太古、八束水臣津野命が、「初国小さく作らせり、故、作り縫うはむ」と、出雲国の小ささへの不満から、新羅(朝鮮半島)や高志(北陸地方)の国土を巨大な縄で引き寄せ、今日の島根半島を造成するという話が、長大な歌謡によつて語られる(意宇郡)。

『丹後国風土記』逸文を出典とする「(h)比治の真奈井」と「(i)浦島子」は、天の羽衣伝説や浦島太郎物語の原型を示す伝奇的な記事で、いずれも神女との出会いをモチーフとした神仙譚である。『淡海国風土記』逸文の「(o)伊香の小江」も同様。

『播磨国風土記』の「(k)堅岡の里」は、巨人神・オホナムチと、小人神・スクナヒコネの二神が、「堅の荷を担ひて遠く行くと、屎下らずして遠く行く」とのどちらが困難か、賭ける話である(神前郡)。

『豊後国風土記』の「(l)餅の的」は、教訓譚である。「昔」、この地には極めて肥沃な水田があったが、富に奢った百姓たちは餅を作つて的として遊んでいたところ、的は白鳥となって飛び去つて行つた、その年の内に百姓たちは死に絶え、田は作られなくなつてしまつたという(速見郡)。

なお、「(n)杵島山」(『肥前国風土記』)を収載する教科書は、これを『古事記』仁徳天皇の条の歌謡物語の参考として、同じ歌が村落の歌垣の文脈で用いられていることを示すために掲げている。「(p)駒手御井」は、仁徳天皇の御代に、播磨国明石駅家にあった巨木から船が造られる話である(『播磨国風土記』逸文)。

こうして見ると、教科書に採られた『風土記』記事は、(n)や(p)を除くとおおむね神々の時代を舞台としており、人の時代であつても神の顕現がモチーフとなるものばかりである。教科書に採られなかった『風土記』については、崇神、景行、応神といった天皇を行為の主体とする地名起源記事も多いものの、それらの天皇は実在性が薄く、行為内容も非現実的で、神話・伝説の要素が濃い。

ところで、前述のように『出雲国風土記』には天皇が行為者として登場せず、代わりに『古事記』『日本書紀』などの中央神話にも登場する神々が、より素朴な形で現れる。『古事記』神話の主要登場神であるスサノハは、本来は「スサの男」、すなわち出雲国飯石郡須佐郷の在地神であつたという見方が通説であり、ここから、中央神話の源泉となつた在地の神話の原型に近い姿が、『風土記』に載せ

られているという考え方も、上代文学研究者の間では（少なくともかつては）支配的であった（10）。こうした見方は、次のような教科書の解説部分にも反映している。

古風土記は地誌としての性質から、上代日本人の各地方における生活環境を知るのに便利であり、説話の部分は断片的であるが、記紀に比して地方色に富み、またあまり手の加えられていないものが多いという特長がある。（武蔵野 1958）

（記紀に対し）こうした皇室ないし貴族文学に対する、民間ないし世俗の説話文学として、われわれはふじゅうぶん不完全ながら、風土記と日本霊異記を持つ。……そこには皇室や貴族の間に行われた説話とは系統を異にした地方民間の神話伝説を求めることができるけれども、それらは多く、報告書類を出ないもので、説話文学として通用する部分はきわめて乏しい。

（秀英 1960a）

「風土記」は、国々の風土・産物にあわせて、山川原野の地名のいわれや古老の言い伝えなどを記録したものである。「古事記」や「日本書紀」は中央で編集されたものであったが、地方で編集された「風土記」には、地方の民間伝承が多く伝えられている。この単元では、こうした神話や伝説を通して民族黎明期の多分に詩的な幻想を読み取る。（実教 1973）

『風土記』の文学的価値をどの程度認めるかは温度差があるものの、比較の対象が『古事記』『日本書紀』の神話であること、それらと

異なつて民間で伝承されたものと考えられていること、が読み取れる。無論、先に見たように、風土記の伝える古の物語が、「神話」なのか「伝説」なのか、もしくは「説話」なのかは難しく、各社の表現も区々である。特に古い時期の教科書はそうで、柳田以前に『風土記』を載せた唯一の古文教科書（1）である秀英 1953 は、「(a) 福慈と筑波」と「(1) 餅的」を採るのだが、「伝説と説話」という単元に、『今昔物語集』などの中世説話と並べ収め、本文の次の「研究」には、「山の説話」「長者伝説」について言及することから、昔話・伝説としての把握がうかがえる。

なお、単元名としては、多くの教科書は『古事記』などと共に「上代文学」とする。中には、「神話」（大日本 1965）、「神話・伝説」（実教 1973）、「神々の活躍」（三省堂 1986）といった単元名のもと、神話・伝説としての性格を強調するものもある。

しかし、東書 1955 の『風土記』評価はというと、

風土記に見える説話は地方的な風習や生活様式を反映している点に特徴が認められる。（東書 1955・本文リード文）

二つの文章の中に古代人のどんな生活や心情が読み取れるか。

（東書 1955・問題 1）

といったように、あくまで（地方人の生活記録）としての面が強調される。実はこうした評価は、この教材の前に収められる『古事記』の神話部分、大國主の物語に対してもなされている。

収録された神話・伝承・歌謡などは、当時の人々の生活のありさ

ま、思想、感情などを反映しており、単に文学の上からばかりでなく、上代の日本を知る上に欠くことのできない資料である。

（東書 1965 / 「古事記」本文リード文）

柳田教科書にとつて、『古事記』も『風土記』も、その神話性、あるいは文学性によつてではなく、上代人の風習や生活の反映としての面で評価されるべき教材であつたようだ。それは、前述の柳田の方針、「文芸に片寄らず」「民衆の生活に近づける」というものと見事に一致するものである。それゆえ、「足利以前は少なくする」「方針にもかかわらず、おそらくは「内容の新味」ゆえに、『風土記』というマインナーな文献からの採用につながつたのであろう。柳田教科書のうち、少なくとも東書 1965 については、このように独自色の強い、一貫した姿勢によつて編まれていることが、こうした教材選択からも確認できるのである。

七、おわりに

柳田国男の実兄・井上通泰（一八六七～一九四二）は一連の『風土記新考』があり、実弟・松岡静雄（一八七八～一九三六）にも風土記関連の著作がある。柳田自身の論文の中にも『風土記』に言及する場面はあり、この文献を知悉していたことは確かである。その柳田が、敢えてこうした記録性の強い箇所を選んだことの意味を、『風土記』研究の立場から考えて見たのが本稿である。柳田は、古典作品の持つ記録的性質にこそ、「国語」教材としての積極的意義を見

出していたというのが本稿の見通しである。

そもそも、柳田にとつて〈神話〉とはいかなるものであつたのかは、今は論述する用意がない。しかし、皇国史観克服を主とする歴史・社会科教育を進めていた当時の柳田にとつて、国語教育における「民族黎明期の多分に詩的な幻想」（実教 1973）といったものは、優先度の低い事柄に属したことは確かであろう。

（せきやゆいち／北海道教育大学釧路校）

【注】

① 佐野比呂己「国語教科書と柳田国男」〔『解釈』四八・五・六、二〇〇二年6月〕。もっとも、柳田は戦前から一貫して、〈良き選挙民を育てる〉ことに公教育の存在意義を見ていたのであるが、ここに、村落の共同性を重んじる彼自身の民俗学との矛盾や齟齬を指摘する論もある（岡部隆志「柳田国男と教科書」『日本文学』六三・一、二〇一四年一月）。

② 東京書籍株式会社社史編集委員会『近代教科書の変遷 東京書籍七十年史』（東京書籍、一九八〇年）四三〇頁。

③ 杉本仁「柳田国男と学校教育 教科書をめぐる諸問題」（梶社、二〇一一年）、佐野比呂己「柳田国男監修高等学校国語教科書の編集方針をめぐって」（『国語教育史研究』一三、二〇一二年一月）。

④ 秋本吉郎『日本古典文学大系 風土記』（岩波書店、一九五八年）、同『風土記の研究』（ミネルヴァ書房、一九六三年）。

⑤阿武泉『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』(紀伊國屋書店、二〇〇八年)、金子知史『戦後高等学校国語教科書における上代散文作品の採録状況―『古事記』・『日本書紀』・『風土記』』、『國學院大學大学院文学研究科論集』三七、二〇一〇年三月)、国立教育政策研究所『戦後教科書』データベース(<https://nierlib.nier.go.jp/hb/database/TEXTBOOK/advanced/?lang=0>)。

⑥注⑤の先行研究によると、次のものに『風土記』が収載されている。以下、「リンクで本稿での略称、編著者(代表者)、書名、出版社、使用開始年、教科書検定番号の順で示す。＊は漢文教科書であることを示す。これらの書誌情報は、公益財団法人教科書研究センター「教科書目録情報データベース」(https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=cKz-xZqMVYzA_3dOR9fO1zB6wh)、および実見による。なお、管見では秀英 1960b 以降から、底本に秋本注(4)前掲『日本古典文学大系』を用いるようになるが、それ以前のもものは、おおむね武田祐吉『風土記』(岩波文庫、初版一九三七年)を用いている。

⑦『風土記』掲載教科書一覧(刊行順)》

＊三省堂 1951 三省堂編修所『漢文3』(三省堂、一九五一年／高
漢 1203)

・秀英 1953 麻生磯次『言語と文学 三』(秀英出版、一九五三年
／高国 1238)

＊中研 1953 舞田正達『新選漢文3』(中等教育研究会、一九五三
年／高国 1231)

・東書 1955 柳田国男『国語 高等学校三年上』(東京書籍、一九五
五年／高国 1267)

＊教図研 1956 内野台嶺・内野熊一郎『新版 標準漢文 卷3』(教
育図書研究会、一九五六年／高国 1273)

・教出 1957 池田亀鑑『標準高等国語古文編 下』(教育出版、一九
五七年／高国 A-1021)

・秀英 1957 麻生磯次『国語1』(秀英出版、一九五七年／高国
1189)

・中研 1957 高等教育研究会『新修国文選上代・中古編』(中等教
育研究会、一九五七年／高国 10-1070)

・白楊社 1957 土橋寛『新歴代文学選上世編』(白楊社、一九五七
年／高国 A-1043)

＊續文堂 1957 福田福一郎『高等学校新漢文3』(續文堂出版、一
九五七年／高国 1293)

・武蔵野 1958 松尾聡・五味智英『要注新校上代・中古文芸新抄』
(武蔵野書院、一九五八年／高国 A-1059)

・東書 1959 柳田国男『新編 国語総合編 三』(東京書籍、一九五
九年／高国 12-1207)

＊実教 1959 宇野精一『高校漢文3』(実教出版、一九五九年／高
国 A-1088)

・秀英 1960a 麻生磯次『国語新編 三』(秀英出版、一九六〇年／
高国 12-1212)

・秀英 1960b 日本文学協会『日本文学選 三』(秀英出版、一九六
〇年／高国 B-1013)

- ・三省堂 1960 土井忠生『高等学校新国語総合 改訂版 二』(三省堂、一九六〇年／高国 12-1215)
- ・大原 1960 成瀬正勝『高等学校国語(総合) 2』(大原出版、一九六〇年／高国 12-1210)
- ・明治 1961 西下経一・今泉忠義『万葉集 源氏物語中心国文新選』(明治書院、一九六一年／高国 B-1035)
- ・角川 1963 野間光辰・金子金治郎『日本古典文学』(角川書店、一九六三年／古典 046)
- ・大日本 1965 山岸徳平・稲垣達郎『高等学校古文(乙2)』(大日本図書、一九六五年／古典 092)
- ・秀英 1965 麻生磯次『国語古文編(乙2)』(秀英出版、一九六五年／古典 088)
- ・三省堂 1965 佐伯梅友『高等古文』(三省堂、一九六五年／古典 083)
- ・書院 1965 岡崎義恵『国語古典乙2古文』(日本書院、一九六五年／古典 068)
- ・明治 1965 西下経一・今泉忠義・篠田融『古文古典乙2』(明治書院、一九六五年／古典 074)
- ・武蔵野 1965 松尾聡・市古貞次・五味智英『日本文芸新抄 古典乙2古文』(武蔵野書院、一九六五年／古典 098)
- ・尚学 1965 新村出『高等学校新選漢文2』(尚学図書、一九六五年／古典 062)
- ・実教 1967 塩田良平『古典乙1古文 改訂版』(実教出版、一九六七年／古典 124)

- ・角川 1967 野間光辰・金子金治郎『日本古典文学 改訂版』(角川書店、一九六七年／古典 142)
- ・秀英 1968 麻生磯次『古文(乙2) 改訂版』(秀英出版、一九六八年／古典 168)
- ・三省堂 1968 古文編修委員会『新編 古典乙2古文』(三省堂、一九六八年／古典 160)
- ・好学 1968 久松潜一『新編 高等学校古典乙2古文編』(好学社、一九六八年／古典 148)
- ・明治 1968 今泉忠義・篠田融・築島裕『改訂 古文古典乙2』(明治書院、一九六八年／古典 154)
- ・中央図 1968 遠藤嘉基『高等古典乙2 改訂版』(中央図書出版社、一九六八年／古典 171)
- ・中央図 1969 遠藤嘉基・谷山茂・塚原鉄雄『新古典 日本文学乙2』(中央図書出版社、一九六九年／古典 173)
- ・大日本 1970 山岸徳平『新訂版 古文(乙1)』(大日本図書、一九七〇年／古典 215)
- ・実教 1970 塩田良平『古典乙1古文 三訂版』(実教出版、一九七〇年／古典 207)
- ・三省堂 1971 古文編修委員会『古典乙2 新編 古文 改訂版』(三省堂、一九七一年／古典 226)
- ・明治 1971 今泉・篠田・築島『古文古典乙2 三訂版』(明治書院、一九七一年／古典 222)
- ・中央図 1972 遠藤嘉基・谷山茂・塚原鉄雄『新古典 日本文学乙2 改訂版』(中央図書出版社、一九七二年／古典 236)

- ・実教 1973 塩田良平『古典1乙古文』(実教出版、一九七三年／古 I-425)
- ・学図 1973 久松潜一『新編 高等学校古典乙乙古文編』(学校図書、一九七三年／古典 148)
- ・明治 1975 市古貞次・今泉・篠田・築島『和歌・歌謡抄 古典2—万葉・古今・新古今中心—』(明治書院、一九七五年／古 II-434)
- ・明治 1983 市古・今泉・篠田・築島『古典古文—和歌・歌謡抄(万葉・古今・新古今中心)—』(明治書院、一九八三年／古文 022)
- ・筑摩 1983 秋山虔・猪野謙二・分銅惇作『高等学校用国語2』(筑摩書房、一九八三年／国 II-027)
- ・筑摩 1984 秋山虔・西尾光一・峯村文人『古典(古文) 説話・物語・軍記』(筑摩書房、一九八四年／古文 055)
- ・三省堂 1986 野元菊雄『高等学校国語2』(三省堂、一九八六年／国 II-057)
- ・筑摩 1986 秋山・猪野・分銅『高等学校用国語2 改訂版』(筑摩書房、一九八六年／国 II-065)
- ・三省堂 1989 野元菊雄『高等学校国語2 改訂版』(三省堂、一九八九年／国 II-096)
- ・筑摩 1989 秋山・猪野・分銅『高等学校用国語2 二訂版』(筑摩書房、一九八九年／国 II-103)
- ・三省堂 1992 野元菊雄『高等学校国語2 三訂版』(三省堂、一九九二年／国 II-136)
- ・東書 1995 吉田熙生『国語2』(東京書籍、一九九五年／国 II-

- 530)
 - ・東書 1996 小町谷照彦『古典2』(東京書籍、一九九六年／古 II-525)
 - ・三省堂 1996 藤井貞和『古典1』(三省堂、一九九六年／古 I-524)
 - ・旺文社 1996 松村明・岡保生・安西迪夫・尾上兼英『高等学校古典2』(旺文社、一九九六年／古 II-536)
 - ・筑摩 1999a 秋山・猪野・分銅『新編 国語2 改訂版』(筑摩書房、一九九九年／国 II-604)
 - ・筑摩 1999b 秋山虔『古典1 改訂版』(筑摩書房、一九九九年／古 I-564)
 - ・東書 2000 小町谷照彦『古典2』(東京書籍、二〇〇〇年／古 II-574)
 - ・日栄社 2000 野間正英『高等学校古典2』(日栄社、古 II-589)
 - ・旺文社 2000 安西迪夫・尾上兼英『高等学校古典2 〔改訂版〕』(旺文社、二〇〇〇年／古 II-584)
 - ・尚学 2000 大岡信・長尾高明・松尾聡『新版 古典1』(尚学図書、二〇〇〇年／古 II-585)
- ⑦記事名は教科書・テキストにより異なるため、稿者が仮に付した(以下、同じ)。本表の作成にあたり、調査不足により実見できていない教科書がある。その場合、同一の出版社から出た改訂版(たとえば、秀英 1965 と秀英 1968)では、改訂前と同一記事と推定し、集計している。そうした推定が困難な場合、本表では「その他・不明」に分類している。なお、この「六〇点」はのべ数であり、

東書 1955 のように『風土記』から二点掲載している教科書も「一」と数えているため【表一】の掲載数の累計とは異なる(た)えば、東書 1955 から「一」と数える(こ)になる。

⑧【表一】の詳細は以下の通り。

- (a) 福慈と筑波 ≡ 三省堂 1951¹、秀英 1953² * 中研 1953³、秀英 1957⁴、東書 1959⁵、秀英 1960a⁶、秀英 1960b⁷、秀英 1965⁸、書院 1965⁹、尚学 1965¹⁰、実教 1967¹¹、秀英 1968¹²、実教 1970¹³、明治 1971¹⁴、実教 1973¹⁵、東書 1996¹⁶、東書 2000¹⁷、尚学 2000¹⁸
- (b) 童子女の松原 ≡ 角川 1963¹⁹、筑摩 1984²⁰、東書 1995²¹
- (c) 夜刀の神 ≡ 東書 1955²² * 実教 1959²³
- (d) 晡時臥山 ≡ 大日本 1965²⁴
- (e) 『常陸』その他不明 ≡ 中央図 1968²⁵、中央図 1969²⁶、中央図 1972²⁷
- (f) 国引き ≡ 教出 1957²⁸、大原 1960²⁹、明治 1961³⁰、角川 1963³¹、書院 1965³²、明治 1965³³、大日本 1965³⁴、角川 1967³⁵、好学 1968³⁶、明治 1968³⁷、大日本 1970³⁸、明治 1971³⁹、学図 1973⁴⁰、三省堂 1986⁴¹、三省堂 1989⁴²、三省堂 1992⁴³、三省堂 1996⁴⁴、筑摩 1999b⁴⁵
- (g) 安来郷 ≡ 東書 1955⁴⁶、東書 1959⁴⁷、三省堂 1960⁴⁸
- (h) 比治の真奈井 ≡ 三省堂 1951⁴⁹、白楊社 1957⁵⁰、武蔵野 1958⁵¹、武蔵野 1965⁵²、旺文社 1996⁵³、旺文社 2000⁵⁴
- (i) 浦島子 ≡ 中研 1957⁵⁵、三省堂 1965⁵⁶、三省堂 1968⁵⁷、三省堂 1971⁵⁸、明治 1975⁵⁹、明治 1983⁶⁰
- (j) 『丹後』逸文その他不明 ≡ 日栄社 2000⁶¹
- (k) 聖岡の里 ≡ 秀英 1960b⁶²、角川 1963⁶³、大日本 1965⁶⁴、角川 1967⁶⁵、大日本 1970⁶⁶、三省堂 1986⁶⁷、三省堂 1989⁶⁸、三省堂 1992⁶⁹

(1) 餅の的 ≡ 秀英 1953⁷⁰、秀英 1957⁷¹、秀英 1960a⁷²、秀英 1965⁷³、秀英 1968⁷⁴

(2) 『豊後』その他不明 ≡ 中央図 1969⁷⁵、中央図 1972⁷⁶、中央図 1972⁷⁷

(3) 杵島山 ≡ 筑摩 1983⁷⁸、筑摩 1986⁷⁹、筑摩 1989⁸⁰、筑摩 1999a⁸¹

(4) 伊香の小江 ≡ 筑摩 1984⁸²

(5) 明石の駅家 ≡ 教図研 1956⁸³

⑨ 以上、大林太良「神話学の方法とその歴史」(『世界神話事典』角川選書、二〇〇五年)。

⑩ 植垣節也「神話資料としての風土記」(『別冊国文学 日本神話 必携』學燈社、一九八二年一〇月)など。

(一) 柳田教科書以前に『風土記』を載せていたものとして、漢文教科書である三省堂 1951⁸⁴ (h) 比治の真奈井と中研 1953⁸⁵ (a) 福慈と筑波)がある。これらは「日本漢文」「漢字漢文の同化」という單元の中に、『本朝文粹』や『日本書紀』と共に、上代日本人による漢文述作の一例として取り上げる。近年の漢文教科書の「日本漢文」單元では頼山陽など近世後期の漢詩文が載るのが通例だが、昭和二〇～三〇年代は『懷風藻』や、『日本書紀』「古事記」における文字伝来記事、遣隋使派遣記事、さらには『律令』における学令などの形で、上代散文が多く取り上げられる。

* 本稿を成すにあたり、本学の佐野比呂己先生、菊野雅之先生より貴重なご助言をいただきました。厚く感謝いたします。

* 本稿は、JSPS 科研費(21K02428)による成果の一部である。